V　1995年度の研究の評価

1.　アメリカ合衆国現地調査の自己評価

(1)　自己評価問題

《アメリカ合衆国現地調査の自己評価》　(1995. 8. 19)

２週間のアメリカ合衆国現地調査旅行，大変お疲れさまでした。今回の現地調査に関して，以下の質問に答えて下さい。（できるだけ具体的に書いて下さい。）

1　今回の現地調査において，ねらいはどの程度達成できましたか。５段階で評定して，その数字を（　）書いて下さい。

(1)　ミネアポリスでのフィールドスタディ……（　　）
(2)　ワシントンD. C. のフィールドスタディ……（　　）
(3)　グリーンビルでのフィールドスタデ　……（　　）
(4)　グリーンビルでのホームスティ……（　　）
(5)　現地調査全体……（　　）

2　今回の現地調査において，ねらい達成の点で最も有益であったものと，最も有益でなかったものは何ですか。その理由も書いて下さい。

(1)　最も有益だったもの：　　（その理由）
(2)　最も有益でなかったもの：　　（その理由）

3　今回の現地調査を改善するとしたら，どうすることが必要だと考えますか。

4　もう一度現地調査を行うとしたら，今度はどんな内容をどんな方法で調査してみたいですか。

(1)　現地調査の内容：
(2)　現地調査の方法：

5　今回の現地調査で特に学んだことを，具体的に３点挙げて下さい。

(1)
(2)
(3)

6　今回の現地調査で学んだアメリカ合衆国の社会と文化について，児童・生徒に最も伝えたいことは何ですか。

(2) 自己評価の結果

アメリカ合衆国現地調査の最終段階で，１９９５年８月１９日にイーストカロライナ大学教育学部会議室で開催した現地調査結果の報告会において，現地調査の参加教師１８名に対して，上記の評価問題によって今回の現地調査に関する自己評価を行った。その結果は下記の通りである。

① 現地調査のねらいの達成度についての５段階評定（問題１）

項　　目	平　均
(1) ミネアポリスでのフィールドスタディ	４．２５
(2) ワシントンD.C.のフィールドスタディ	４．１４
(3) グリーンビルでのフィールドスタディ	４．４２
(4) グリーンビルでのホームスティ	４．５０
(5) 現地調査全体	４．３１

② 今回の現地調査において，ねらい達成の点で最も有益であったもの（問題２）

項　　目	人数
調査活動のすべて	4
グリーンビルでのフィールドスタディ，ホームスティ	4
沢山のアメリカ人との出会い，話し合い	3
ミネアポリスでのフィールドスタディ	2
パートナーのすばらしさ	2
禁煙に対する人々の意識	2
ワシントンＤＣでのフィールスタディ	1

③ 今回の現地調査において，ねらい達成の点で最も有益でなかったもの（問題２）

項　　目	人数
なし	１０
グリーンビルでの調査報告作成および教材開発会議	3
グリーンビルでのフィールドスタディ，学校訪問	2
ミネアポリスでのフィールドスタディ	2
ワシントンＤＣでのフィールスタディ	1

④　今回の現地調査を改善するとしたら，どうすることが必要だと考えるか。（問題３）

項　　目	人数
パートナーとの事前打ち合せ	6
事前準備	4
現地調査時期・期間の改善	3
語学力	2
現地調査地域の改善	1
ホームスティ先の情報収集	1
目的地に自由に移動ができる交通手段の確保	1

⑤　もう一度現地調査を行うとしたら，今度はどんな内容を調査してみたいか。
（問題４）

項　　目	人数
教育問題・学校教育・教科指導	4
アメリカの大規模産業（自動車・農業など）	3
文化・生活・習慣の相違とその背景	3
同じテーマをもっと深く	1
他民族国家における問題点とよさ	1
コミュニティのプライドやメンタルヘルス	1
子供たちの様子・考え	1
日米の教師による実際のチームティーチング	1
歴史観・経済観	1
音楽・美術などの面での国際理解につながる調査	1
なし	1

⑥　もう一度現地調査を行うとしたら，今度はどんな方法で調査してみたいか。
（問題４）

項　　目	人数
多くの人へのインタビュー・対話	3
授業見学や教師・生徒との討論	3
人々の生活の具体的な場面の見学・調査	3
ホームスティでの生活	2

学校における国際理解教育の推進状況の把握	1
教科書の内容と現在のアメリカの変化の比較調査	1
子供たちと一緒に生活する	1
日米の子供に今回の教材で実際に授業	1
英語教員と他教科の教員とのミックスグループの活動	1
今回と同様の方法	1
なし	1

⑦　今回の現地調査で特に学んだことを，具体的に３点挙げて下さい。（問題５）

項　　目
・州によるバリエーション ・日本に対して向く視線 ・子供を取り巻く生活環境の大切さ ・飲酒に対する考えの違い ・人々の生活の具体的な様子 ・環境問題に対する政府・州・市・市民の積極的な取り組み ・どんな人種も自然に受け入れ，福祉に対する考え方が浸透していること ・積極的にコミュニケーションを図っていくことが相手理解につながり，受け入れられること ・子供たちの生活傾向は日本と似ているが，伝統を大切にするということよりもより新しいもの，良いものを求めていること ・子供たちの興味・関心をとても大切にしていること ・公立と私立でそのシステムや活用している人たちが明らかに違っていたこと ・日米の子供たちの平和に関する願いはかなり共通しており，人間としての共通部分をしっかり学ぶことが将来の希望につながる ・ベル先生の，「異なる人々が寛容し合えるためには互いの文化・歴史についてしっかり学ぶことが前提」という言葉 ・パートナーの先生との出会い ・自分をもっとみがく必要があるということ ・他者をよりよく理解することが日本よりもより切実だということ ・他民族からなるアメリカ合衆国において，良さを自然なかたちで取り入れながらより新しいものを創造する努力 ・民族の伝統を大切に将来に伝えるとともにそれを民族理解に生かそうとする日本の考え方の良さの再確認 ・完全週５日制に向けて地域社会での子供から高齢者までのレクリエーションの場とスタッフの保障がアメリカでなされていること ・合衆国ではより良いと思われることをとことん追求していること（禁煙の徹底，

問題生徒への対応システム）
・合衆国は合衆国であり，思った以上に州により違いがあること
・合衆国は階層差が大きいことや広大な国土を背景に予想以上の農業力であること
・ミネアポリス市周辺での水と親しみ，川や水を大切にして汚さない人々のモラルや行政の働き
・水量が豊富でダムなしで水源が確保できること
・下水処理の普及率の高さ
・ディスポーザーが普及しており，生ゴミというイメージがあまりなかったこと
・「埋め立て地不足」ということがリサイクルに力を入れだしたという驚き
・消費社会アメリカの規模の大きさ
・それぞれの民族で固有の文化にこだわらず，アメリカという一つの国としてまとまっていこうという姿勢
・ボーイズ・アンド・ガールズクラブのような学童保育の施設が充実していること
・子供の遊びは日米では最近大変似てきていること
・禁煙教育が大変進んでおり，日本も大いに学ばなければならない
・肉体労働などのきびしい仕事には黒人やヒスパニックなどが多く，アメリカの抱えている問題の一つと考えた
・アメリカが大変豊かな国であると感じたともに，青少年の抱えている大きな問題も感じることができた。
・都市環境だけでなく仕事や収入という中心となるものが安定していないと都市住民の快適性は得られないこと
・ホームスティ先の体験を通してのアメリカの生活
・住民参加の政治システム
・市民や地域社会から意見を吸い上げるシステムが確立していること
・アメリカは価値観が多様で一般化できないこと
・自分の力不足を再認識したこと
・現地調査を行う上での語学力の大切さ
・現地調査を行う上での環境教育・国際理解教育に関する専門知識の大切さ
・男女平等社会と自立
・日本とは明らかに異質な「豊かさ」，日本のそれは質的には高くても，どこか危なげな豊かさに思えてきた
・多人種・他民族・多宗教の入り混じった社会を学校現場という視点から見ることができたこと，その具体的な対応策を教師から聞けたこと
・語学力が最優先するということを厳しく認識したこと
・日米が同じ問題を抱えているということ
・教員のきめ細かな取り組み（授業のための教材や活動の準備など）
・日本との類似点が表面的にはよくあること
・人々の大らかさ
・システムの効率化

⑧　今回の現地調査で学んだアメリカ合衆国の社会と文化について，児童・生徒に最も伝えたいことは何ですか。（問題６）

項　　日
・日本はアメリカの模倣だけではだめで，独自のものを考え出すこと，アジアにも目を向けること ・都会だけがアメリカではなく，アメリカのほとんどは田舎にあること。そこでの生活は決して収入が多いとは思わないが豊かであること。 ・広大な土地と寛大な心 ・子供たちの視点から社会のシステムなどを伝えたい ・体験したことのすべて ・アメリカの子供たちも自分たちの問題を解決しようと努力しているということ ・アメリカ合衆国の他民族の良さを取り入れながらより新しいものを創造する努力と，伝統を大切に将来に伝えようとする日本の考え方 ・常により良さを求める姿勢 ・水の環境，行政レベル・個人レベルの取り組み，地球にやさしい水の使い方は同じであること ・アメリカの農業規模の大きさ，豊かさ，ゆとり，ゴミ処理に対する人々の意識の高さ ・経験したことすべて，特に子供の遊び，アメリカの家庭生活の様子，メディアの充実 ・徹底した禁煙教育，アメリカの自由・豊かさと問題，日米の生活の違いなど ・日本と色々な違いがあるが，人間の願いは皆同じであること ・違った人々が共存するにはお互いが受け入れ合う大らかさが必要で，日本の教室内でも相手を認め合えばもっと楽しくなる ・アメリカの学校や家庭生活の一端 ・建前ではなく，真の意味で個性を生かそうとする合理性を教師も親も社会も，そしてなによりも生徒本人が持っているということ ・表面的な相違点の背景にある同じ／異なった試み，またアメリカを一つの側面で見ないようにできる視点の複数化の必要性 ・国民性・習慣の違い，「人にやさしく」がどこの国でも当たり前であってもドアの開閉や「イキュス・キャーズ・ミー」の連発などの行動が人への思いやりにつながること，アメリカでできて日本でできないといった考えは捨てたい

2. 各チームの研究の自己評価

(1) チームＡ（武智，中森，原）

① 事前研究について

(a) チームＡは，環境問題への取り組みとして，小学４年生で学習する「くらしとごみ」（特にリサイクルについて）に関連した教材作りをすることにし，「日米のごみリサイクルの比較」をとりあげた。特に，日本でも問題になっている空き缶やペットボトルの処理の問題にどう対応しているのか，ディポジット制度の定着ぐあいや企業の協力の様子，ボランティアとしての地域住民の協力などに焦点を当てることにした。

(b) 米国現地調査の前に，日本でのごみ処理にかかわる問題や，４年生でどの程度の内容を学習しているのか，また，どのような資料があるのか，それぞれ収集し，持ち寄り研究をした。また，リサイクルセンターに取材にも行き，できるだけ新しい情報を収集した。そのため，日本でのごみ処理に関する共通認識を持つことができた。

(c) 現地での調査に際して，学校訪問があれば，日本での４年生の学習内容を理解してもらうため，教科書や資料を英訳しプレゼントとして用意し，情報交換に役立てることにした。

(d) 事前に現地のパートナーに調査希望を送り理解を得ていたが，この時点では，米国のごみ処理事情がどのような様子なのかはつきりしない点があるため，教材化の骨子は決めなかった。ただ，数値や統計資料がどのくらい集まるか分からないし，語学力の心配もあるため，科学的な資料集めというよりは，見聞風の物語り様式にすることだけを決めておいた。

(e) 少ない共同研究の時間であったが，調査のおおよその構想，日本のごみ処理事情についての事前学習が効率的に進められた事が，現地調査での混乱を最小限にくい止められる要因になった。

② 現地調査について

(a) 現地のパートナーの先生方のお陰で，膨大ではあるが，効率的な現地調査をコーディネイトしていただき，予想を上回る素材を収集することができた。パートナーの先生はもちろんのこと，現地訪問先のスタッフの皆さんの時間を惜しまない協力的な対応に大変感謝している。

(b) ごみ処理施設等の訪問先では，見れば分かるものについては，説明をしていただかなくて，そこで働く人の感想や地域住民の考え方，協力の様子を主として聞き取る予定にしていたが，施設の機能に関するスタッフの親切な説明を無視して，我々だけが一方的に質問するわけにもいかず，聞くための時間が長かったのは残念であった。

(c) 現地調査に当たっては，写真係，記録係，インタビュー係と仕事分担を明確にしていたのは，調査上のロスが少なく効率的な活動ができたと思っている。特に，記録に関しては，説明の中にでてくる数的なものを中心にメモしていたことが，夜の調査結果のまとめに役立った。

(d) 調査報告書はその日のうちにワープロで文章化し，教材化についても素材のどれが活用できるか話し合いながら現地で構想を立てていった。そのため，事前研究で話し合った予想とはずれる事実があったにしても柔軟に対応できた。

③ 事後研究について

(a) 広島市と東広島市在住のチームであったため，チームだけで集まるのに便利がよく，その点では，他チームに申し訳ないほど緊密に話し合えた。

(b) 現地調査の記憶の新しいうちに，教材文を作り，検討できたのは正確を期す点でよかった。

④ 教材開発にあたって

(a) 物語り風の教材を構成するにあたって，日米の違いを明確にすることよりも，共通していることに主眼をおいて構成してみた。読んで理解できること，少し考えるための書き込みの項目の設定など，あくまで4年生の児童に興味が持てるよう，できるだけ難解な言葉は避けて構成してみた。

(b) 教材化にあたっては，日本の子供達が読んで理解できるようには作成してきたが，米国の児童が読んで興味が持てるかどうか心配な点もある。日本のごみ処理を紹介する視点から，もう一つ物語を構成すべきであったが，そのための時間を確保できなかったのが残念である。

(2) チームB（吉浦，洗川，永田）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) 事前研究の時間が限られており，グループで話し合う時間に不足を感じた。

(b) 日米の遊びの比較というテーマを掲げていたか，日本の遊びについての事的研究と分析が不十分だった。

(c) 前年度の調査チームから，研究についての示唆をいただき，たいへん参考になった。

［現地調査について］

(a) ミネアポリスでは，パートナーのマクドナルド先生が日本語と日本文化をよく理解しておられたので，我々の意図に沿った適切なコーディネートをしていただき，調査活動がうまく進められた。

(b) グリーンビルでは，教育研究の立場の方々から多くの示唆を受けることができ，ミネアポリスとは異なった調査研究をすることができた。

(c) パートナーやホームスティのホストファミリーが教育関係者であったため，様々な貴重な体験をしたり，アドバイスを受けろことができた。

［事後研究について］

(a) メンバーはそれぞれ離れているため，会合が持ちにくく，役割を分担して研究を行った。そのため，研究会及び会合でも，効率のよい作業が進められた。

(b) 現地調査を終えてから教材作成終了までがあわただしく，十分に吟味できなかった。

「教材開発について］

(a) アメリカの小中学校の先生方に教材を吟味していただいた後で，教材を完成させたかった。

(b) 現地調査の中で，仮説と異なる結果が出たが，それらを有効に取り入れることによって，違った意味で深まった教材の開発ができた。

(c) 日米の子どもの目から見た旅行記の形式で教材化を行うという構想が早い段階で固まったため，教材化がスムーズに進んだ。

［事後研究について］

(a)　まだ現地調査の記憶が新しいうちに，事後研究の会を持ったのは有効であった。

(b)　２学期は学校行事などが多かったが，全体の会合以外にもチームとしての会合を持つことができたのは良かった。

(c)　現地調査で作ったネットワークで，必要な資料を送ってもらうことができた。

(d)　チーム内でも必要なことはファックスで意見交換をしたのは良かった。

［教材開発について］

(a)　早い段階から教材作成を目指して取り組み，教材の骨子を作成し，現地においてパートナーの先生にみていただき，アドバイスをいただくことができたのはたいへん参考になった。

(b)　アメリカにおける禁煙運動の実態から日本は何を学ぶべきかというテーマでディベートを考えた。

(c)　中学校，高等学校のいずれにも教材として活用できる内容とすることができた。

②　今後の課題

［事前研究］

(a)　現地で調べる内容については，現地の情報をできる限り収集した上で決定したほうが良い。そのためには，できるだけ早くパートナーと連絡が取れるようにする。

(b)　チーム編成を早期に行ない，事前調査の会合を多く持つようにする。

(c)　アメリカについての情報をしっかりと調べたうえで研究テーマを決めたらどうだろうか。そこで，新たにテーマを設定するのではなく今回の各チームの研究成果を参考にして，あるいは各チームより詳しく聞き，さらにそれを深めるようにしたらより研究的になると思う。

［現地調査］

(a)　現地での訪問先についての情報を前もって知っておきたい。ネットワークを使ってパートナーと意見交換ができれば望ましい。

(b)　一日の活動量が多く，まとめや翌日の準備があまりできなかった。チームでの打ち合わせの時間が取れるようにしたらどうだろうか。

(c)　英語の先生への負担が大きいように思う。社会科の教員もある程度の英語力は付けておく必要がある。

［事後研究］

(a)　記憶が新鮮なうちに何回か会合を持つ必要がある。

(b)　ファックスなどを有効に利用すべきである。

［教材開発］

(a)　ＶＴＲなどの教材開発を含め，より具体的で多様な教材を開発してみてはどうだろうか。

(b)　これまでの研究協力者から教材作成についての反省や注意点，また，実際に授業をしてみての感想などを聞いて参考にすると良い。

(c)　国際理解教育のための教材であるということをしっかりと理解しておかなくてはいけない。

(d)　開発した教材を実践することばもちろん，今回の各チームの教材を実践した結果を引

② 今後の課題

(a) 今回の調査を通して，日米でより充実した研究を進めていきたい。

(b) この教材を使って，日米で授業を行い，授業記録をもとにした分析等を行い，よりよい教材に高めていきたい。

(c) 中学校段階の英語教育として考えた場合，この教材は日本語での提示を考えているので，導入することが適切なのかどうか疑問を感じる。今後検討が必要な部分である。

(3) チームC（上之園，平田，深沢）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) チームCは，日米の環境問題への取り組みを水と人々との関わりを通して見ていこうと考え，研究のテーマを「循環する水と人々のくらし」とした。テーマが大きかったため，実際の調査では焦点がしぼれないまま，やや網羅的な調査になった。

(b) 事前にアメリカの水事情を十分に把握できず，どのような内容の質問を行うか，資料収集を行うかを細かく決めることが不十分であった。

(c) 途中メンバーの変更があったが，メンバー相互の連絡を密に取り，十分な共通確認ができたため，事前研究に支障をきたすことはなかった。

［現地調査について］

(a) 現地調査では，パートナーをはじめ多くの方々がいろいろなところを紹介してくださるなど，たくさんのご支援をいただき，多くの素材を得ることができた。

(b) 現地では一日の活動量は多かったが，調査の後に検討の会をほぼ毎日もち，調査の整理をその日のうちに文章化（ワープロに打ち込む）しておいた。このことは，次の調査課題を明らかにするとともに，事後研究，教材化の際に調査を想起する上で有効であった。

［事後研究について］

(a) まだ，現地調査の記憶が新しいうちに事後研究会（9月初旬）をもったのは，有効であった。できれば，全体での報告会よりもチームごとの分科会の時間を多く取ったほうが整理，教材化に向けての準備が行いやすい。

(b) 全体での会以外にチームでの会を宿泊を伴って行った。このことで調査のまとめと，教材化に向けての話し合いを十分行うことができた。今回は一度だけであったが，さらに会を設定できれば，事後研究が深まったと思われる。

「教材開発について］

(a) 現地調査で写真等を様々な角度から数多く撮影しておいた。このことは，帰国後の教材開発を行っていく上で，非常に役立った。事前に考えていた教材化の方向を変更する場合もあるため，広い範囲の素材収集をしておくことも必要である。

(b) 子どもたちが抵抗なく楽しく学習できるように，キャラクターの漫画や写真，絵図を多く取り入れ，視覚に訴えるように考えたが，メンバーが特技をいかすことにより，構想に近い教材を作ることができた。

② 今後の課題

(a) 大きなテーマを掲げた場合は，さらに焦点化したサブテーマを設定し，より具体的な

方向付けを行っておくと，調査や教材開発をスムーズに行うことができる。

(b) 早い時期からパートナーとの連絡をとり，現地の事情を把握しておくと，質問内容や資料収集について細かく決めることができる。

(c) 現地調査の記憶が新しいうちにチームごとの分科会を中心にした事後研究会をもてれば，調査の整理，教材化に向けての準備が行いやすい。

(d) 現地調査では，テーマを拡大して広い範囲から素材収集（写真等）をしておくと，帰国後の教材化の際に非常に役に立つ。

(4) チームD（森，齋藤，栗林）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) チームDのテーマは，「青少年非行防止のための教育～禁煙教育を中心として～」とし，アメリカの青少年をとりまく社会環境の実情を調査しその実態をふまえたうえで，青少年の健全育成に向けて，学校・家庭・地域がそれぞれどのような取り組みをしているかを探ることにした。その際，２週間という調査期間と日本の青少年が抱えている問題という二つの点を考慮して，青少年の喫煙の問題に的をしぼった。

(b) 日本の中高生の喫煙の実態や中高における禁煙教育の内容（指導案など）等を持ちよってアメリカとの比較を試みることにした。アメリカの実態が十分わからないので，日本の実態だけはしっかりと把握していくことにした。

(c) 今回の現地調査は，アメリカでも煙草生産で有名なノースカロライナ州なので，喫煙の背景にある煙草産業にも目を向けることになった。そこで日本の煙草産業（ＪＴ）の実態も調べていくことにした。

(d) 現地調査の前に，どのような形でどのような内容のインタビューや資料収集をするのかなどを細かく決めた。質問紙なども用意した。

(e) 現地調査のための準備が全体会の機会だけでは十分にできず，チームでの会合を待った。

［現地調査について］

(a) ミネアポリスでは，パートナーの先生がいろいろなところを案内してくださり，効果的な調査活動ができた。ここでは，おもに一般社会における喫煙の実態をつかむことができた。

(b) グリーンビルにおいては，煙草農場，学校，教育委員会など，煙草産業と青少年の健全育成のための機関を見てまわることができた。

(c) グリーンビルでは事前にファックスで調査内容を送付していたので，パートナーの先生が，適切に案内をしてくださった。青少年非行についてのフォーラムなどもありたいへん勉強になった。

(d) 現地調査中に大統領クリントンの煙草に対して厳しく臨むという発言がありアメリカの喫煙に対する姿勢がうかがわれたのはタイムリーであった。

(e) 毎日ではなかったが，チーフ会議が持たれ他のグループとの情報交換が行なわれたのは良かった。

(f) 今回，現地においてまとめのための時間が設けられたのは非常に良かった。

き続き交流する機会を持ちたい。

⑸　チームE（安井，高石，宇城）

①　事前研究について

研究テーマは，「平和について考えよう！」である。当初は，戦後５０年という節目を迎えた今年，あの戦争について日米両国でどのような意識差があるのかを確認することを目的としようとしたのだが，調査範囲の限界から，教材として活用できるだけの具体性・客観性を持たせるには困難であることが予想された。そこで，とにかく平和についてのイメージを確認し，その実現のための行動化に結びつくような教材を作成することにした。

日米両国に共通の動機付けとして，ジョン・レノンの名曲「イマジン」を取り上げ，事前に，平和のイメージと，その実現についてのレポートを集めることとして，日本でも中学生に作文させ（可能な場合英文で），アメリカのパートナーにも同様のレポート収集を事前に依頼した。この段階では，まだ自分たちが作成しようとする教材の全貌はまるで見えてこず，苦しい状況であったと思う。

②　現地調査について

漠然とした状況で渡米したチームに，ある方向が見え始めたのは，やはり現地のパートナーに依頼しておいたレポートに目を通してからであった。日本からの一方的な依頼であったにもかかわらずまず，かなりの数のレポートが集められていたことば，大きな驚きと喜びをもたらしてくれたのである。戦中世代とも言える高齢者や，一般の大戦や国防についての意識は，日本とかなり異なるものであることは予想はされていたものの，やはり大きなショックであったし，深く考えさせられた。また次の時代を担う子供たちが，太平洋を越えて同じ気持ちで平和について考えようとしていることは，彼らのために教材を作ろうとするチームにとっては大きな励みとなった。

レポートの翻訳はかなりの難作業であったが，パートナーの適切なアドバイスもあって現地調査・資料収集は進んでいった。戦争中の日米の意識差～相手をどう見ていたか～を具体的に示すような当時の資料探しと，日米双方のレポートから平和への願いの共通点を探り出す作業である。

またチームの目的からして，ワシントンでの，「ホロコースト博物館」「エノラ・ゲイ展」の見学は，大きな収穫となった。

③　事後研究について

帰国後の研究としては，現地で入手した資料の解釈と取捨選択，及びそれに対応する日本側の資料収集であった。これは簡単だろうと楽観視していたのだが，意外と適切な資料か見つからず苦労し，ＥＣＵ図書館の資料の豊富さが思い出された。

④　教材開発について

こうしたタイプの教材は，ともすれば具体性に欠けがちになるので，目標を明確にし，実際授業で使用した場合を想定して，作成しなければならない。さらに完成後も，授業で得たデータを元に，生徒たちの生の反応を資料として加えれば，より完成度を高めることができると思われるので，今後もチームとしての連絡を取りあい，手を加えていきたいと考えている。

(6) チームF（大月，野村，大西）

① 事前研究について

(a) 国際理解教育と環境教育，行政組織，教育事情等についてチーム内での事前研修が不足していた。

(b) 教材開発（テーマ設定）にあたり，できるだけ早く教材のイメージをもち，学習指導要領の目標や内容，児童生徒の発達段階や実態等から何学年の教材に適しているか，教材化できるか等を検討する必要があった。

(c) チーム内で話し合う時間が少なかったため，テーマや調査内容等の共通理解や先行研究，文献研究，資料収集等が不十分であった。

(d) テーマが漠然としていたことと，チーム内で話し合う時間が少なかったためか，現地での調査内容や調査方法の具体案（計画），役割分担等が不十分であった。

(e) 数回のチームでの話し合いにより，テーマの追究への意欲とチームワークの高まりを感じるようになった。

② 現地調査について

(a) 言語や習慣，社会的環境の異なる中での聞き取り調査の難しさを感じたが，このような活動を通して国際理解が少し深まったたように思った。

(b) 一日の活動時間と情報量が多く，その日のまとめや，翌日の準備があまりできなかった。

(c) グリーンビルでは特定のパートナーが決まらなかったが，スペンス氏に過密スケジュールの中を精力的に案内していただき大体計画どおり調査できた。

(d) 多くの人と出会い，多くの場所を訪れる中で，私たちの意図が十分伝わらないはがゆさも感じたが，体験を通して「百聞は一見にしかず」の感をもつことができたのは収穫であった。

③ 事後研究について

(a) 現地調査の記憶の新鮮なうちに報告書，教材開発の原稿（第一稿）を仕上げ，チーム内で検討を重ねたかった。

(b) 総社市をチームで自然的環境，施設的環境，情緒的環境という住みやすいまちづくりの視点で調査（視察）できたことは意義があった。

④ 教材開発について

(a) 授業を実施する校種や学年，活用の目的，方法，評価等を明確にしておくと，内容の重点化や精選，構成や表記上の配慮もできたように思う。

(b) 今後，授業で活用するためには，学習指導案の作成が必要である。

(c) 帰国後，各地を訪れるたびにその都市を自然的環境，施設的環境，情緒的環境という住みやすいまちづくりの視点で見ることができるようになった。

3. 日本側評価者による評価

(1) 広島プロジェクトに関する評価シート

広島プロジェクト３ヵ年の評価

職名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1. 広島プロジェクト３ヵ年のアメリカ合衆国現地調査について

(1) 特色と成果

(2) 課題

2. 広島プロジェクト３ヵ年の教材開発について

(1) 特色と成果

(2) 課題

3. 広島プロジェクトの今後の方向性について

(2) 評価の結果

① 岩田一彦教授（兵庫教育大学）

1. 広島プロジェクト３ヵ年のアメリカ合衆国現地調査について

(1) 特色と成果

現地調査に際して，年次毎の視点を明示し，かつ，調査方法を焦点化したところに最大の特色がある。また，視点の内容が，生活文化の比較，歴史的伝統の比較，問題解決の姿の比較，と設定されていて，新しい社会科の教材開発として，最も望まれている内容となっている。また，調査方法に関しても，問題発見型調査，仮説検証型調査，問題解決型調査，と多様性を確保しているところが特色で

ある。

調査に際して，研究調査パートナーを設定して，その先生方の協力を得ての調査は効率性の点からも重要である。また，この設定が，現地の先生方との密な交流に発展している点が評価できる。

(2) 課題

調査時間不足のため残した課題を，今後どのように扱っていくのかが，今後の課題である。また，現地調査に際して交流をしてきた先生方との協力関係を，どのように生かして，アメリカ社会の理解の進展に資するかの検討も，今後の課題である。

2. 広島プロジェクト3ヵ年の教材開発について

(1) 特色と成果

3ヵ年の教材開発が，見事に構造化されている点が高く評価できる。例えば，カリキュラム開発に関しては，学校，家庭，コミュニティ，職場，州・国家，といった広がりのどの分野の教材も開発されている。また，それらは，文化理解，問題解決というカテゴリーの中にも均等に配置されている。

教材開発・教材研究において，問いの質および活動の質を視野に入れ，認識形成および経験に際して，その質の良さを確保している点も特色である。

3ヵ年の研究期間に，年次的に研究内容および調査方法において深まりが見られる。これは広島プロジェクトが，研究計画の実施を成功的に実施してきた証拠である。

(2) 課題

教科書・学習指導要領の下で行われている学習指導に際して，開発した教材をどのように位置づけることができるのかの検討が，今後の課題である。また，異文化理解の視点からの教材開発であったという限界性から，日本とアメリカが厳しく対立している側面での教材開発が不十分であった。厳しく対立している事実の理解が，より深い理解につながるといった視点からの開発が，今後の課題である。

3. 広島プロジェクトの今後の方向性について

3ヵ年の研究が実り多いものであったことは，研究成果の検討からも確実である。この研究成果を日米両国の実際の授業の場で生かしていく道を検討したい。そして，その情報交換も必要であろう。また，日米教師の交流の活発化のための方策を考えていくことも，広島プロジェクトに残された課題であろう。

② 棚橋健治助教授（広島大学教育学部）

1. 広島プロジェクト3ヵ年のアメリカ合衆国現地調査について

(1) 特色と成果

先行諸プロジェクトの多くが，現地調査の対象地を年度ごとに変えているのに

対して，広島プロジェクトでは3ヵ年を通じてグリーンビル，ミネアポリスそしてワシントンを中心として行われている。対象地を変えた場合，広大で多様な合衆国の広範な地域を可能な限りカバーすることで，合衆国理解が深まるという考え方をとっていることになる。それに対して広島プロジェクトは，3ヵ年の現地調査を同一地域で各々，「問題発見」「仮説検証」「問題解決」と位置づけて実施することによって，横への広がりではなく，縦への深まりとして理解の深化を考えていることが大きな特色といえよう。

(2) 課題

上記のような意図通りの現地調査が実施されているが，このような調査の場合見知らぬ土地の珍しいことを見聞きして集めてくるだけとは違い，前年度の調査成果の消化，事前の十分な文献研究と，現地での十分なコミュニケーションが求められる。年度ごとに調査者が大幅に交代し，調査の時間も必ずしも十分とは言えない制約をどのように克服するかが課題といえよう。

2. 広島プロジェクト3ヵ年の教材開発について

(1) 特色と成果

現地で何か使えそうな資料を収集してきて，帰国後，それを使える授業を考えるというものではなく，調査をしながら，現地のスタッフとともに，現地で教材開発を試みているという点が大きな特色である。それによって，補充すべき資料の収集，収集資料の解釈や授業での使用可能性・方法などについて，現地スタッフの意見を広く取入れることに成功し，日本国内で日本人だけで構想する教材開発より，一歩踏み込んだものになっている。

(2) 課題

事前の十分な準備のうえで行われたとはいえ，現地での時間的制約や言葉の障害などから，現地での教材開発に関する機会が，企画者の意図を十分達成するところまではいかなかったのではなかろうか。

3. 広島プロジェクトの今後の方向性について

広島プロジェクトが試みた上記の現地調査ならびに教材開発の独特のあり方はいくつかの課題を残しているものの，この種のプロジェクトの進め方の新たな方向を示唆するものとして，その保持・発展のさせ方を検討していくことが求められよう。また，各年度のメンバーが，3ヵ年の全体構造の中に自己の研究成果を位置づけ，プロジェクト全体としての成果を個々のメンバーが共有できるようにすることを検討することが求められるのではなかろうか。

4. アメリカ合衆国側評価者による他者評価

(1) 広島プロジェクトに関する評価シート

Evaluation Sheet about the Hiroshima Project

Please answer the following three questions.
We are looking forward to having frank response from you.

*Name:*_____

Q1. Comments on the activities of the Hiroshima Project for three years.

Q2. Comments on the development of materials for understanding of American Society and Culture by the Hiroshima Project.

Q3. Suggestions for the development of the Hiroshima Project in future.

(2) 評価の結果

３年間のアメリカ合衆国現地調査にあたって，継続して研究協力者として援助してもらったイーストカロライナ大学のメンバーに対して，上記の評価シートによって，３年間の広島プロジェクトについての評価をしてもらった。その結果は下記の通りである。

① ドン・スペンス博士

Ｑ１

ノースカロライナ州グリーンビルでの広島プロジェクトの活動は，活動が進むにつれて，アメリカ合衆国についての教材開発により焦点化されていった。また，学校教育の専門家同士の大きな関わり合いがあった。ノースカロライナ州での現地調査の大きな特徴は，日本訪問を計画していたり，また訪問したことのある地域の教師や教育行政官と一緒に仕事を行っている大学の教員養成の専門家が現地調査に加わったということである。グリーンビルの学校にとっての最大のメリットは，ノースカロライナ州の学校での日本チームの現地調査活動が，日本社会に関して同じテーマについて研究しながら多くのものを発見しようとしているグリーンビルの教師や生徒に大きな興味・関心を喚起したことである。こちらの学校とこのプロジェクトに参加したチームの中国地方の学校との間に，とてもよい共同研究のための協力関係が生み出された。

Q 2

開発された教材は大変すばらしいものであった。それらは，ノースカロライナ州での現地調査の成果を生かすことに成功している。特に最終年次の現地調査では，事前の資料収集に基づいて教材を改善するために地域の教師や教育専門家と共同研究のための時間をもったことは，大変有意義であった。教材は常に改善され，迅速に印刷されている。比較研究の成果がうまく生かされ，またアメリカ合衆国について日本の教師が授業する場合に使い易いものである。我々も最近，第7学年の社会科クラスでの日本についての比較学習の授業において，我々の方法でいくつかの教材を使用した。

Q 3

お互いの文化を理解し合うための授業の教材を開発するために，両方の文化の国の教師によるプロジェクトに発展していくことができるならば，それはもっと有意義なことである。たぶん，お互いが同意したテーマについて協力して教材を開発するという活動が，学校間のパートナーシップをより発展させることに寄与するであろう。一年目は日本側教師のチームがアメリカ合衆国のパートナーを訪問し，翌年はアメリカ合衆国の教師が日本のパートナーを訪問するといったやり方が，広島プロジェクトの発展したアプローチとして求められてよいと考える。そのようなパートナーシップこそが，相互の関係の継続をさらに発展させるであろう。また，両国の教師や教育行政官にとっても，生徒や教師がお互いの文化に接近するための，あるいはお互いに絶えず学び続けていくための新しい方式の開発という点も，おおいに寄与するであろう。

② エドウィン・ベル，ヘンリー・ピール，H．C．ハジンズ博士

Q 1

あなた方が広島プロジェクトを出発させた際，このプロジェクトは大変期待できるもののように思えた。また，広島プロジェクトの活動は，我々にとっても興味ある活動であった。我々は選ばれたテーマについて十分調査可能であるし，その成果は我々にとっても有用であると考えていた。そして，広島プロジェクトに対して，我々は現地調査の最初の段階での助言という形で支援していった。

Q 2

我々は，次のような方法で教材を研究することが有益であると考えている。

① 質問表による方法

② 記録された資料の分析による方法

③ 人間によって生み出されたものの研究による方法

④ 規範や価値の吟味という方法

Q 3

学部間の協力だけでなく，アメリカ合衆国と日本の教師間の協力関係も広げることが大切であると考える。また，二つの組織の間のコミュニケーションを日常的に前進させていくことが大切であると考える。我々は，あなたがたと共同してこのような研究をさらに続けていくことを期待している。

Ⅵ　１９９５年度の研究の総括と今後の課題

1.　１９９５年度の研究の総括

(1)　１９９５年度の研究成果

日米の社会と文化の相互理解を目指した現地調査・教材開発，日米両国の教師の共同研究としての現地調査・教材開発，社会科教師２名と英語教師１名のチーム編成による現地調査・教材開発，日本語・英語の２ヵ国語の教材集としての教材開発，以上のような第１・２年次の研究の特色は，本年度においても踏襲した。第１・２年次の研究に付け加えての本年度独自の研究成果は，次の６点である。

① アメリカ合衆国における環境問題，多民族・多文化問題，青少年問題，平和問題といった社会の問題の解決の努力を理解するための６つのテーマについての教材開発を行うための現地調査を，ミネアポリス市（ミネソタ州），ワシントンＤＣ，グリーンビル市（ノースカロライナ州）の３ヵ所において，アメリカ合衆国側のパートナーの協力の下に行い，その成果に基づいて，日米の社会問題の解決の努力の相互理解を目指した日本語版と英語版の６つの教材を開発することができたこと。

② アメリカ合衆国側のパートナーの多くが第１・２年次と同じメンバーであったことや，ミネソタ州日米協会とイーストカロライナ大学のコーディネーターが組織的に協力してくれたことによって，ミネアポリス市での２日間，グリーンビル市での４日間のフィールドスタディを通して，日本側教師とアメリカ側教師との間のより焦点化された調査と，より強いネットワークづくりができたこと。

③ 第１年次は問題発見型，第２年次は仮説検証型の現地調査を行ったが，最終年度である本年度は，研究課題が社会の問題の解決の努力であったため，どうしたら問題を解決することができるのかという問題意識からの，問題解決型の現地調査を行うことができたこと。また，グリンービル市での現地調査では，調査前日のイーストカロライナ大学図書館での文献調査，４日間の現地調査，現地調査後のイーストカロライナ大学での教材開発会議というように，本格的な教材研究・教材開発のための現地調査を行うことができ，参加教師のアメリカ合衆国の社会と文化の理解を一層を深めることができたこと。

④ 今年度は，日本側評価者とアメリカ合衆国側評価者によって，３ヵ年の広島プロジェクト全体に対する他者評価をしてもらうことができ，今後の広島プロジェクトの方向性が明確になったこと。

⑤ 今年度は，第１・２年次の研究協力者からの要望に応えるために，広島大学国際理解教育研究会の「会報」の創刊号および第２号を出し，第１・２年次の研究協力者に配布することを通して本年度の研究を広報し，研究協力者の相互交流を図ることができたこと。

⑥ アメリカ合衆国と日本の社会と文化を相互に理解するためのカリキュラム開発の視点として，次の３点を発見することができたこと。

(a) アメリカ合衆国と日本の社会と文化を相互に理解するためには，社会や文化の特色を理解するための教材だけでなく，現代社会が直面している社会や文化の問

題の解決の工夫・努力を相互に理解するための教材が必要であること。

(b) そのためには，社会の問題や問題解決の姿の相違点と共通点を発見（「どのような違いがあるのか，どのような点が共通しているのか」）するための「記述」の活動，相違点と共通点が生まれる背景・理由・条件・原因を探求（「なぜそのような相違点があるのか，なぜそのような共通点があるのか」）するための「説明」の活動，問題を解決するための最も合理的な手段・方法を選択・決定（「問題を解決するためにはどうしたらよいか，もっとよい方法はないか，どの解決策がより望ましいか」）するための「判断」の活動，以上の３つの活動を重視した教材研究・教材開発が必要であること。

(c) そのための教材としては，家庭，学校，コミュニティ，職場，州・国家という社会生活の中での，日米の人々の社会的な問題の解決の姿を比較しながらその解決策を考えることができるような，より具体的な事例を選択することが必要であること。そのためにも，日米の教師が共同で教材開発を行うことや，そのためのパートナーシップやネットワークづくりが特に大切であること。

(2) １９９５年度の研究の問題点

研究メンバーの自己評価の結果に基づくと，１９９５年度の研究の問題点は，次の３点である。

① 今年度は，研究協力者からの要望が強かったグリーンビル市での学校訪問および授業見学を実現するために，現地調査への出発を１週間遅らせ，旅程も昨年度とは逆コースとしたが，結果的には新学期直前の時期と重なってしまい，現地のパートナー，学校関係者，ホームスティ先に大きな迷惑をかけることになった。現地では可能な限りの配慮をしてもらったが，日本の夏休み中に行わなければならない現地調査の時期の決定については，十分考慮しなければならないことを痛感した。

② 昨年度の反省のうえに立って，今年度は現地調査の結果に基づいて相互理解のための討議を行う時間や教材開発のためのワークショップを行う時間を設定し，現地で教材開発の構想を完成させることを意図したが，必ずしもメンバーのニーズに応えるものにはなりえなかった。限られた時間の中では，十分な現地調査の時間の保障の方がより大切であるかも知れない。

③ 今年度の研究課題は，環境問題，多民族・多文化問題，青少年問題，平和問題といった，現代社会の問題の解決の努力であったため，問題を解決するためにはどうしたらよいかという問題意識で事前研究および現地調査を行ったが，限られた滞在期間の中での現地調査で課題を焦点化することは難しかった。日本での事前研究において，調査研究や文献研究等の充実を図ることによって課題を焦点化しておくことが必要であった。

2. 広島プロジェクトの今後の課題

(1) 多面的なネットワークづくりの推進とパートナーシップの拡充・発展

日米の教師の共同研究としての現地調査・ワークショップ・教材開発を中心とした広島プロジェクトの３ヵ年の研究を通して，日本側の参加教師とアメリカ側の参加教師との間

のネットワークづくり図ることができた。しかし，それはまだ個人的な協力関係の構築や教師間の友情を深める段階にとどまるものである。

今後は，日本の各小・中・高等学校とアメリカ合衆国の各小・中・高等学校との間の継続的なネットワークづくりとパートナーシップの拡充・発展，日本側の参加教師とアメリカ側の参加教師との間の継続的なネットワークづくりとパートナーシップの拡充・発展，児童・生徒同士のコミュニケーションの実施など，日米両国間の多面的な人的ネットワークづくりを進めていくことが必要である。そのためにも，日米両国の教師の継続的な相互交流が必要である。

(2) 日米両国の教師による共同研究としての教材開発

広島プロジェクトの３ヵ年の研究では，生活文化，歴史的伝統，現代社会が直面している問題の解決に焦点をあてて，日本とアメリカ合衆国の社会と文化を相互に理解するための教材を，アメリカ側の教師の協力のもとに開発してきた。しかし，短期間での現地調査に基づく教材開発であったこともあり，共同研究としての教材開発という点では不十分さが残った。その結果として，日本側の関心からの教材が多く，相互理解のための教材開発という点では課題が残るし，改善すべき点も多い。また，社会や文化の背景の理解という点でも，深く考察するまでには至らなかった。

今後は，共通のカリキュラム開発のためのフレームワークや教材化の視点に基づいて，日米両国の教師による本格的な共同研究として教材開発を行うことが必要である。また，両国での研究授業を通して開発した教材の修正・改善を図っていくことも必要である。

(3) 開発教材の実践化と研究の継続・発展

広島プロジェクトの３ヵ年の研究を通して，日本とアメリカ合衆国の社会と文化を相互に理解するための教材を開発してきた。第１・２年次の研究協力者の中には，それらの教材を小・中学校の授業で活用しているもの，研究物や論文に掲載するなどしてそれらの紹介・普及に努めているもの，公民館や教育センターなどの講座で活用してものもいるが，開発した教材の実践化という点ではまだ不十分である。

今後は，研究協力者の実践的研究を支援していくようなシステムを作ることや，日米両国での実践を通しての教材の修正・改善を図っていくことができるようなシステムを作ることが必要である。そのためにも，広島大学国際理解教育研究会の研究組織の継続と研究の発展が必要になるであろう。また，３ヵ年の研究成果の出版についても，今後検討していくことが必要であろう。